

菊池寛文學全集
第五卷

文藝春秋新社

菊池寛文學全集

第五卷

五〇〇円

昭和三十五年八月二十日發行

發行所

文藝春秋新社

著者 菊池 寛
發行者 車谷 弘

© 1960

東京都中央区銀座西八ノ四
振替 東京七八七四三

印刷・大日本印刷

製本・中島製本

製函・加藤製函

目

次

第一話	大江ノ定基	一五八
第二話	狩場の雨	一六二
第三話	密会厄難(一)	一六六
第四話	八幡太郎の愛人	一六九
第五話	鳴門中將物語	一七一
第六話	衣 更	一八〇
第七話	密会厄難(二)	一八二
第八話	盗人の良心	一八四
第九話	平 仲	一八六
第十話	時平の女事	一九一
第十一話	大力物語	一九六
第十二話	女強盗	二〇六
第十三話	ばくち	二一四
第十四話	あし刈り	二一八
第十五話	ついに逢う身	二二二
第十六話	石のまないた	二二七
第十七話	街道の厄難	二三三
第十八話	鳴神上人	二四〇

第十九話 外 術

二四五

第二十話 競馬と角力

二五一

おわりの言葉

二六四

日本合戦譚

川中島合戦

二六九

山崎合戦

二八九

鳥羽伏見の戦

三〇一

大阪夏の陣

三一

応仁の乱

三二三

小田原陣

三三五

日本武將譚

太田道灌

三五三

明智光秀

三六七

黒田如水

三八一

伊達政宗

三九五

加藤清正

四〇九

石田三成

四二三

仇討三態

四四一

仇討出世譚

四七一

仇討禁止令

四九三

日本十字軍

五三一

解説

山本健吉

五四三

菊池寬文學全集

第五卷

編 纂 委 員

中 永 河 小 川 山

村 井 盛 林 端 本

光 龍 好 秀 康 有

夫 男 藏 雄 成 三

新
今
昔
物
語

六宮姫君

今は昔、六の宮と云う処に、宮腹の子に兵部の大輔と云う人が住んでいた。

宮腹の子と云うのは、皇族の女性を母に持っていることである。それは内親王、もしくは皇族の姫君の子であると云うことを意味するが、然し時めいていると云うことにはならない。

藤原氏の全盛時代だったから、皇族であると云うことが権勢を意味していなかったし、宮腹と云うことも系図の尊貴を示しているが、栄華を示していなかった。この話の主人公のように、むしろ後世の貧乏公卿と云うような意味にさえとれるのである。

兵部大輔と云っても、それは一度兵部大輔を勤めたことと云うことで、現職ではない。兵部大輔の位は、正五位下である。殿上人てんじょうびとには違いないが、最下位である。現職を離れていては、五節ごせちの式会しきえなどに、参内するだけである。

現職に在る間は、衣食を賜うが、それを離れると、たゞ位田だけで生活する外はない。位田と云うのは位についている田地である。正五位は、わずかに十二町である。

しかも遠国の越前に在ったから、途中の運送難で、年に五六十俵の米しか届いて来ない。しかも、折々は途中で、盜賊に掠られて、一俵も届かない年さえもある。

屋敷は、父祖以来住んでいるもので、宏大なものであったが、二十年來何の修繕もしないから、寢殿など破損してしまつて、雨洩れが幾個所も出来て、使用に堪えなくなっている。

泉殿や、西の対も寢殿同様にあれている。東の対だけは、どうやら手を加えて、こゝに全家族が住んでいる。主人の兵部大輔と北の方と娘一人と、その外は乳母と女中が二人と下男が三人である。二、三年前までは、牛車もあつたが、車が破損して以來は、牛飼の童だけが下男として仕えている。主人や、北の方が外出する時は近所に住んでいる親戚の家から、一時車を借用する始末である。主人は、こうした窮境を脱しようとして、四、五年前までは、年々除目の行われる前は、いろいろ運動していた。

除目と云うのは、一年の初に行われる官吏の大更迭である。一度だけは、どんな遠国でもいゝから国司になりたいと思つていたが、はかばかしい友人もない彼を、推薦してくれる人は、誰もなかった。年々の除目にもれている裡には、到頭あきらめてしまった。

こうなつて来ると、希望は、たゞ娘一人にかゝっていた。北の方は、染殿の後の孫娘に當つていた。染殿の后と云えば、関白良房の娘であつたが、本朝一と云われるほどの美しい方であつた。

一年、物の怪に煩わせられて、あらゆる御祈り修法をとり行わせられたが、露の験もないので、大和国葛城山の頂きに住んで居る貴き聖人を、宣旨を以て御前に召して、加持をさせたところ、その験著かにして、忽ち御惱が癒えた。が、その時后のお姿をかい間見た聖人が、道德堅固の身でありなが

ら、あまりに端正美麗のおん姿に、心が迷い気が碎けて、深く愛欲の心を起し、現世では思いのままにならないために、自ら食事を絶つて死して、悪鬼となり、后を悩まし奉ったと云う伝説がある后である。多分、これが歌舞伎でやる「鳴神上人」の原話であろう。

こうした血筋を引いて居られたから、十五になられた春には、白木蓮の蕾のような、得ならぬ氣高い美しさを持つて居られた。父、兵部大輔も母、北の方も、掌の玉と鍾愛されて、起きては母君が片時も傍を離れず、夜は父母の間に寝せて、めでいつくしむ事、限りがなかった。

殊に、母君は娘が女御更衣にようごういに召されても、また関白や大臣おとどなどの公達きんだうが通つて来られても、恥しくないようにと、女一通の学文や諸芸を、心をこめて教えていた。

男の子を持たぬ兵部大輔夫妻の希望は、この娘が然るべき公達と、情縁を結ぶと云うことが、たゞ一つの希望であつた。またどんな公達が通つて来られても、この娘なら、おろそかに思われる筈はないと云う、心の誇りを持つていた。

然し、何分にも貧乏なので、権門勢家の人々との交際など、思いも及ばなかったし、また姫自身として、四季折々の晴着などあるわけではない。物語遊山などに、一度も出て行つたこともないから、然るべき公達の眼にふれる機会など、さら／＼あるわけではない。

その上、姫についている乳母が、苦心して相手を探そうと云う熱意も才覚もなかったから、姫はまるで、深山の花、深海の底の白玉のように、人の眼にふれないで十五、十六、十七と、あたら花の盛りを過されてしまったのである。

姫が、十八の春を迎えられた正月に、父、兵部大輔は、ふと風邪が因もとではかなく世を去つてしまつ

た。すると、まるで良人の跡を追うように、母、北の方が、その年の五月の初に、これもそれほど重い病氣だと思われなかったのに、日に／＼衰えて行つて、ついにはなくなつてしまつた。

世にたゞ一人、取り残された姫君の悲しみは、限りもないものであつた。感情的にも致命的な痛手であつたが、それに劣らない生活上の痛手が伴つた。主人が死んで、男子の後継がないと、位田が半分になつてしまふのである。その上、女手では遠国への督促なども、はかばかしくは出来ないの、年々送つて来る供米が、いよ／＼心細くなつてしまふのである。しばらくの間、数多くあつた道具などを、売つて暮していたが、それもだんだん残り少くなつた。消極的であつた乳母も、今はいろ／＼知り人の間をかけ廻つて、姫のために、頼みになるような相手を探す外はなかつた。

姫が十九になつた秋の初である。漸く候補者が、一人見つかつた。それは、乳母の兄弟である僧の仲介である。それは、越前の前の国司の長男である。廿二、三歳であるが、形も美しく、心ばえも直しい方で、通つて来られても、決して恥かしい方ではない。又、その父君が、今は非役であるが、元来参議の次男であるから、来年の除目に、必ず国司として相当の大国に赴任されるに違いないと云うのである。参議と云えば宰相とも云われる大納言中納言に即ぐ太政官の官吏で、位も三位以上で、いわゆる公卿もしくは上達と云われる。

しかし、深窓に育つて、慎しい内気な姫は、こう云う話にも、乗気にはならなかつた。男を持つことが、生活のためだと思ふと、たゞ悲しいだけであつた。乳母から、この話を持ち出されたときも、肩にかかる黒髪を乱して、さめ／＼と泣き伏してしまつたのである。

もちろん乳母に対して、はか／＼しい返事などするわけはなかつた。